東京日々新聞

七百八號

越後の國新潟の藝妓
今川屋雛と言る者
あり面色
美あり
ことく
雛の
也容桃

桜のごとく艶あるねど強を採て客と浮くもの妙
あるい其繁昌殆ど三味線の彈もさらぬ是ふ於て
畜財千四ふ及べく然るふ雛ふ情郎ありて名を敦賀屋喜
右エ門と呼び廿年來馴親しと既ふ二女を生し長女い等しく
藝妓さりさじも漆膠の中さり共金い敵の世ありくん敦喜一朝米相場の
失策ふり千有餘四の損とうり夫を償ん為め窮ふりの畜財を持出さると雛い夢ふざふ去らぬ尺しく
闇浮陀金の開帳とふさんと輦笥の引出しを明さふ光明何ぞへ玉光りを放ちて影ざふ止めぬ足必竟
敦喜の所為ふらんと是を公ふ訴へんとせしちど止る若ありて其事ふ至らざれども
遂ふ為ふ病ひとあり又藥許ふぬして快氣ふ至らとあり

蕙齋芳幾

人形甲 真足屋 渡辺彫栄

東京日々新聞708号　文庫10-8059-12
早稲田大学図書館蔵／Waseda University Library